

レポーター：五十嵐さん、こちらの作品。ぱっと見たときにまず、鮮やかなピンク色がものすごく印象的だったんですけども。

学芸員：どこの国の作品だと思いますか。アジアのどこか。

レポーター：そうですね。どこなんですか。

学芸員：えーと、これはインドの作品なんですけど。

レポーター：インド。

学芸員：でもなんか後ろの背景が描いていないと、どこの国かわからないですよ。

レポーター：そうですね。後ろの背景が一色。

学芸員：なんかちょっとそういう幻想的な、どの国のどの時代の、なんか現実が起こったことを描くというよりは、もうちょっとその幻想的なものを描いているんですけども。インドのマンジート・バワという男性の作家のえーと 1995 年のけっこう最近ですね。

レポーター：ほんとですね。

学芸員：描かれた作品です。

レポーター：これは、女性ですよ。

学芸員：ですよ。多分胸らしきものがあるので、多分女性だと思うんですけども、この作品のタイトルは曲芸師っていうんですけども。

レポーター：曲芸師。

学芸員：はい。曲芸師っていうと例えば綱渡りだとか、日本だったら、はしごの上に登って曲芸したりとかありますよね。そういうのがインドにもあって、その大道芸人の人がいるんですよ。で、それを多分しているんだろうと、思うんですけども。曲芸師の仕事っていうのは、男性がするものなので、女性はまずほとんどいないと思うんですけど、でも、これは女性で描いてあるんですよ。また、ちょっとここで、現実と描かれているものとの違いがありますよね。それから何か不思議なものがありますか。

レポーター：これ、最初ですね、羽かと思いました。飛んでるのかなと。

学芸員：なんでしょうね。なんか羽にも見えるし、頭の上にこうスカーフみたいなのを巻いているので、そのぴらっとなった部分みたいにも見えますよね。この人はですね。なんかお腹になんかマットみたいなものがありますよね。それで、下に棒があって、その棒の上にこうマットがあって、その上に体を乗せるそういう曲芸をしているんですけど、何メートルくらいの高さにいると思いますか。

レポーター：えー。

学芸員：曲芸ですからね。みんなが見てうわーっとびっくりして、お金をあげるっていうような芸をしている人なので。

レポーター：5メートルくらい

学芸員：そうですね。この美術館の天井よりももうちょっと高いくらいですけども。

レポーター：えーっ。

学芸員：そのくらいの高さのところの、長い棒の上にマットがあってその上にお腹を乗せているっていう曲芸をしてるんですね。その5メートルの上に乗っていると、落ちるかもしれないじゃないですか、落ちたら死んじゃうじゃないですか、だから、死なないように、羽が生えてるのかな〜っていうのも、一つ見方としてはあるかもしれませんね。

レポーター：背景がピンク色だから、柔らかい感じがしますね。

学芸員：そうですね、このマンジート・バワという作家が描く作品はいつも背景が一色なんですね。それも黄色とかちょっと薄い紫とか、ちょっとパステルがかった、ふんわりした印象の背景一色に書いているんですけど、それにはそのインドって昔からその細密画の伝統があるんですけども、細密画ってだいたい後ろがけっこう、山とかは少し書いてあるんですけど、一色で塗られていることが多くって、その伝統を引き継いでるのかなと思います。あとは人物とかも、どこの国の誰ともわからない、幻想的でしかも線がちょっと柔らかい感じですよ。それがこのマンジート・バワという作家の特徴だっという風にいられています。

レポーター：見る人によっていろいろな解釈があるからまた面白いですよ。

学芸員：そうですね。

レポーター：友達同士で来て、私はこうだと思う、いや、こうだと思うっていいながら、いろいろ解釈していくのも楽しいですね。

学芸員：是非、そうやって見ていただければと思います。